



## 活字のこわさ

中村 彰 一\*

昨年1月末の工学部長選挙で、はからずも工学部長に選ばれました。その記事が翌日の各朝刊に掲載されたのですが、ある新聞では大阪府八尾市出身と書かれておりびっくりしました。と言いますのは、私は生れたのが東京で、その後門司、大連、神戸、再び大連と、父親の仕事の関係で、小・中学校時代は各地を転々とし、高等学校は岡山、大学は東京で過し、大阪大学には昭和22年末から勤務しておりますが、阪大に来た当初は神戸に住んでおり、八尾市に移ったのは昭和25年からであるためです。昔は本籍も東京にあったのですが、現在では八尾に移してしまった関係で、八尾市出身と書かれたと思いますし、これまでの人生のうち八尾に住んでいる期間が一番長いわけですから、八尾の住民と言われればまさにそのとおりですが、出身と書かれるとやはり抵抗を感じる次第です。

この新聞記事だけならばそれほど気にもしなかったのですが、今年1月の大阪大学工業会の会誌に、昨秋行われた工学部の50周年記念行事関係の記事として、岡田 實先生の「工学部50年の回想」と題する記念講演の附録として、工学部の発展の経過と、歴代学部長の

氏名、略歴及び在任期間中の主要事項が列記されている最後に、私の名前と略歴が記載されているのですが、それがまたまた大阪府出身となっており、今さら東京都出身と言っても誰も信用しないのではないかと感じている次第です。

以前に、関西造船協会で造船設計便覧を編集出版する事業に参画し、編集委員長として校正にも携わり、多くの委員の手をわずらわして慎重かつ綿密に見たつもりが、でき上がった本を見直してみるとミスプリントが続々と発見され、正誤表を作ったのですが、その正誤表にまたミスがあったりして、活字のこわさを痛感した経験があります。

「生産と技術」誌にミスプリントがあるとは申しませんが、出版物というものは、正しい情報を間違いなく印刷することに関して、慎重の上に慎重を重ねることが最も肝要であると思います。またこのことは逆に言えば、活字になったものはすべて正しいと頭から決めてかからず、絶えず疑いの精神をもって探究することが、研究や開発の発展につながるものであると信ずる次第です。

「生産と技術」に関係のないことを述べて、貴重な誌面をけがしました点御容赦下さい。

\*中村彰一 (Shoichi NAKAMURA), 大阪大学, 工学部, 造船学科, 教授, 工学部長, 工学博士, 造船学